

研究ノート

昭和戦前期における宮内省御用掛と外交官 — 外務省記録を中心に —

芳澤直之

はじめに

第一次世界大戦と世界的な君主制国家の動揺は日本の宮中にも多大な影響を及ぼした。皇太子裕仁親王のヨーロッパ外遊に象徴される宮中の試みは、新たな皇室のあり方が模索される中において、画期的な出来事であった。⁽¹⁾同時に日本の外交官が宮中の業務にかかわりを持つようになった。現役外交官による宮内省御用掛の兼任は、大正から昭和への代替わりと同時に誕生し、アジア・太平洋戦争末期にまで及んだ（「別表一」参照）。そこで本稿では、およそ二十年に及んだ現役外交官による宮内省御用掛兼任の特質を明らかにすることで、その歴史的意義を述べていきたい。

近年、近代日本の宮中研究は元老をはじめとする、内大臣と宮内大臣として侍従長など宮中上層部を対象にした研究が深化した。⁽²⁾しかし、外交官の宮内省御用掛兼任はもとより、宮中と外交の関係に注目した研究は多くない。⁽³⁾その要因として、明治期に伊藤博文によって内閣中

心の国家運営システムが構築されたことにある。⁽⁴⁾そのため、「皇室外交」と形容される皇室と外交の関係は、政治と一線を画していることは自明のこととして受け止められている。

そこで、本稿では時系列順に、次の四点に注目して述べていきたい。第一に、澤田廉三電信課長が初めて現役の外交官として宮内省御用掛に任じられた背景について。第二に、宮内省式部職の動向と関連づけながら、情報部長白鳥敏夫と人事課長三谷隆信が任じられた背景を検討する。第三に、白鳥の更迭と元オランダ国駐劄特命全權大使松田道一の就任について。第四に、儀典課の新設と儀典課長の宮内省御用掛の兼任について述べていく。また、本稿の全体に徹底する昭和戦前期の宮中と外交の関係をめぐる特質として、外務省による各国の皇室報道に関する情報収集活動と関連づけて述べていきたい。

一、昭和初期の澤田廉三電信課長と宮内省御用掛の兼任

大正一〇年代は宮内省官制改正に象徴されるように、宮中では抜本的な改革が行われた。⁽⁵⁾それと呼応するかのようには、牧野伸顕宮相を始め、東宮大夫に珍田捨巳（後に侍従長）や、式部長官に井上勝之助が就任するなど、外務省を母体とする人々が宮中の要職を占めるようになった。その後、昭和への代替わりと同時に、現役外交官が宮内省御用掛を兼任するようになった。ここで、外務省記録M.二.一〇.一八「本省員宮内省御用掛兼勤関係一件」⁽⁶⁾所収の史料を中心に、現役外交官の御用掛兼任が実現する過程を述べていきたい。

大正一五年（一九二六）一月一九日、珍田捨巳東宮大夫は出淵勝次外務次官を訪れ、澤田廉三電信課長の宮内省御用掛兼任について協議した。⁽⁸⁾この協議内容は幣原喜重郎外相に伝達された一方、珍田は摂政裕仁親王に次のように「言上」した。

殿下ハ国政ヲ變理セラルルニ当リ國務大臣ノ輔弼ヲ受ケラレ又陸海軍ニ対シテハ殿下自ラ統帥権ヲ行ハルル外陸海軍武官各二名常侍奉仕シテ陸海軍事ニ関スル御下問ニ奉答シ居ル次第ナルカ陸海軍事ト同様極メテ重要ナル外交問題ニ関シテモ格別注意ヲ払ハルル必要アル処重要ナル外交政務ニ関シテハ何時ニテモ外務大臣ニ御下問ノ途有ルヘキモ新聞紙等ヲ御覽ノ際御氣付ノ事柄等ニ付キ御研究ノ御相手トモナルヘキ外交官ヲ御用係トナシ置カルル事可然ヤト存スル⁽⁹⁾

珍田は侍従武官のような官制上に定められた「常侍輔弼」までいか

なくとも、天皇の外交に関する「御研究ノ御相手」が必要との考えを示した。ここで重要なのは、「政務」に関しては、従来通り外務大臣に対する「御下問」とし、御用掛はあくまで「新聞紙等ヲ御覽ノ際御氣付ノ事柄」など「御研究ノ御相手」としたことである。このように区分することで、明治以来の「宮中・府中の別」の原則という論理をクリアしようとした。その点を踏まえた上で、珍田は澤田を起用するにあたっての利点を次のように述べている。

電信課長ハ職責上最モ迅速ニ在外公館ヨリノ電信ヲ取扱ヒ且又一切ノ電訓等ヲ悉ク閲読シ居ル關係上我外交ノ全般ニ対スル知識ヲ有シ居ルヲ以テ殿下ノ外交問題御研究ノ御相手トシテ最モ適任ト認メラルル⁽¹⁰⁾

たしかに、電信課はその分課規程によれば「電信ノ接受及發送」⁽¹¹⁾を掌る部署であり、澤田はその電信課の業務を総括する立場にあることから適任であった。こうして摂政時代を含めた天皇の「外交問題御研究ノ御相手」として、白羽の矢が立ったのが電信課長澤田廉三であった。

しかし、「外交官宮内省御用掛」には留意事項があった。第一に、当然ながら電信課長は「繁劇」のため、「毎日奉仕スルコト不可能」であるとし、「当分先ツ一週間一回奉仕」とすること。第二に、澤田の「奉仕年限」は「外務省ノ事務ノ都合ニ依リ何時他ニ転スル場合有」り、且つ「必スシモ電信課長ト限定スル次第ニアラサルコト」の以上二点を留意事項として「言上」した。⁽¹²⁾もともと、摂政は「本御用係ハ余り

頻繁ニ交代セラル、コトヲ希望セラレサル」様子であったが、珍田は「外務省ノ事務ノ都合ニ依リ何時更迭ヲ見ルヤモ凶リ難」いことを理由に、摂政に理解を求めた。⁽¹³⁾このようにして、澤田課長の宮内省御用掛の兼任に至るまでには、珍田侍従長の働きかけによるものが大きく、外務省側も条件を付した上で、「何等差支無」と承諾するに至った。⁽¹⁴⁾

その後の、摂政時代を含めた昭和天皇と澤田課長との間の具体的な「相談」内容は詳らかではないが、『昭和天皇実録』には澤田はたびたび「御進講」という形で天皇に召されていたことが確認できる。⁽¹⁵⁾御用掛である以上、「御進講」という形は当然であったが、そもそも宮内省御用掛とは、元官僚や大学教授など有識者から構成されていたことを踏まえると、実務当局者が起用されるのは極めて稀であり、異例の人事であったと言える。⁽¹⁶⁾こうした人事を可能にした背景には、先行研究でも指摘されているように、国際協調外交を支持する天皇・宮中上層部と「幣原外交」との親和性に求めることができる。⁽¹⁷⁾「外交官宮内省御用掛」の誕生は、こうした国際協調外交とリンクしていたといえる。そのため、宮中や外務省上層部は、即位して間もない青年の天皇に対して、外交上における形式よりも実質を重視し、「外交官宮内省御用掛」には、天皇を「補導」する役割の一端を担うことが期待されたと考えられる。

二、情報部長と人事課長による宮内省御用掛兼任とその背景

しかし、昭和四年（一九二九）一月一六日、珍田捨巳侍従長は亡く

なり、翌五年（一九三〇）七月には、澤田廉三は大使館一等書記官として英国勤務を命じられた。⁽¹⁸⁾このように、「外交官宮内省御用掛」はその推進役であった珍田の死によって、転換点を迎えることになった。澤田課長の後任には、情報部長白鳥敏夫と人事課長三谷隆信⁽¹⁹⁾が宮内省御用掛に任じられた。一木宮相は白鳥部長と三谷課長の二名につき、幣原外相に照会を求め、了承された。⁽²⁰⁾先述したように、後任は必ずしも電信課長が兼任するものではないとされた。しかし、情報部長と人事課長が兼任することになった理由は詳らかではない。そこで、情報部長と人事課長が選任された理由を検討していきたい。

まず、人事課については、その連携相手となる宮内省式部職の動向を無視することはできない。人事課の分課規程には、「叙勲及褒賞ニ関スル事項」と「謁見其ノ他儀式ニ関スル事項」とあり、⁽²¹⁾外務省内における皇室関連の業務も管掌していた。一方、昭和初年は宮内省式部職への外交官の進出が著しかった。昭和四年（一九二九）二月、式部長官に林権助⁽²²⁾が就任し、林長官の下には式部次長として、岡部長景⁽²³⁾が就任した。岡部の日記によれば、当初の式部長官候補に、西園寺八郎が上がった際、西園寺は「長官としては外交官と口がきけぬ様にては職務まら」ないと固辞していた。⁽²⁴⁾一方で、木戸幸一は「岡部君が式部次長になると長官に西園寺八郎では逆になる。細かいことは長官に行つて聞いてくれといふ様なことになるだろう」と述べているように、次長が岡部で決まった以上、長官には宮内官が適任と認識していた。このように、外交官が式部職内で長官、次長を占めることは異例であつ

たが、換言すれば、宮内省を主管官庁とする明治以来の皇室と外交の
関係は転換点を迎えたといえる。⁽²⁶⁾そのため、三谷人事課長の宮内省御
用掛兼任も、このような連携先の式部職の動向と関連付けて考える必
要があると思われる。

次に、情報部長が選任された事由であるが、その管掌事項から電信
課と同様に、情報部は外交上の情報を把握できた点で共通している。
相違点は、受動的に電信を接受・発電する電信課に対し、情報部は能
動的に発信・収集していた点にある。情報部は大正一〇年(一九二一)
八月一三日の官制公布をもって公式に設置された。⁽²⁷⁾大正一四年四月に
は、幣原外相は昭和天皇への進講の際に、「情報部ハ外国ノ新聞、通信
等ニ正確ナル報道ヲ供給シ、又外国ヨリ足ル通信員、新聞雑誌記者、
旅行者等ニ各種ノ便宜ヲ与ヘテ日本ヲ正解セシムルコトニ努メ」、「毎
日ノ外国新聞ニ掲載セラルルニヨリ外国ニ於テハ自ラ我国ニ関シ興味
ト理解トヲ有スルニ至ラムコトヲ目的トス」と説明している。⁽²⁸⁾このよ
うに、情報部による情報収集は外国新聞や雑誌に掲載された皇室に関
する記事の調査も含まれていたと考えられる。しかし、外国に対して
情報部がいかなる啓発活動を行っていたのかは詳らかでない。外務
省記録として残っているのは、各国駐在の大公使からの報告であり、「我
皇室ニ関スル新聞記事送付ノ件」と編綴されて、外務省記録シ、一〇〇。
〇八「帝国皇室ニ関スル雑件」第一巻に所収されている(別表二
参照)。その中で特に、昭和七年(一九三二)一月一四日付の、駐仏
代理大使栗山茂発の幣原外相宛ての報告が簡潔にまとめられているの

で、やや長文になるがここに掲載しておく。

当国「ジュルナル」紙ハ客年十月二日ヨリ同月十三日二亘り日、英、
白、伊、塞、羅、勃、波斯、和蘭、瑞典、諾威各国皇室並羅馬法
王ノ日常御生活振リニ関スル記事ヲ連載セルカ我皇室ニ関スル八
日同紙ノ記事概要ヲ示サバ先ツ天皇大権ニ付簡單ナル説明ヲ為シ
以テ天皇陛下ノ日常御生活ガ極メテ御多忙ニ互ラセルル⁽²⁹⁾所以ヲ
叙シ又皇后陛下ガ至尊ノ御身ニモ拘ラズ日常内親王殿下ノ御養育
ニ努メ給ヒ以テ臣民ニ婦徳ノ範ヲ垂レ給フ次第ヲ述ベ更ニ進ンデ
天皇陛下ノ御趣味ニ付テハ自然科学ニ関シ深キ御造詣アラセラレ
菌類ノ新種御発見或ハ葉山御用邸ニ於カセラルル貝類御採集カ陛
下ノ最モ好マセラルル処ナル事、又御運動トシテ、御乗馬ニ練達
シ給フ事等ヲ述ベ更ニ天皇陛下ガ経済、社会問題等ノ研究ニモ頗
ル御熱心ニアラセラレ屢々御進講ヲ聴カセラレ給フ趣ヲ述ベ又宮
中ノ御行事トシテ観菊、観桜ノ御宴御歌会等ヲ説明シ居レリ⁽³⁰⁾

このように、海外の報道機関が報じた天皇に関する記事は、外務省
にとつても関心事であったが、その目的を明らかにする上で、各文書
の処理過程を明らかにする必要がある(別表二参照)。まず、右
文書の処理過程は次のようになる。⁽³¹⁾栗山大使から幣原外相に発出され
(公信普通二七一号)、接到日は同年二月一六日となっている。翌一七
日に人事課が受領し、主管は三谷人事課長の押印があることから人事
課であったことがわかる。その後、同文書は一木喜徳郎宮相のもとに
回付され、宮内省側とも共有した。⁽³¹⁾宮内省における文書の処理過程

については、今後の課題としたい。

こうした外務省による外国の皇室報道に関する情報収集は管見の限り、昭和二年三月二六日（幣原外相宛）から、昭和一四年七月六日（有田八郎外相宛）まで確認される。主管部署は情報部と人事課であったが、それぞれの管掌範囲は判然としない。そして、後述する儀典課に集約されていくことになるが、現地の日本外交官の報告はいずれも詳細であり、その多くが天皇の日常に関する記事の特記事項として報告している点が興味深い。このように、皇室をめぐる外国メディアの報道ぶりの取り扱いを見ると、情報部と人事課が主管しており、いずれもその総括する立場の者が宮内省御用掛を兼任していることは、偶然ではないと考えられる。

三、白鳥敏夫の更迭と松田道一の就任―宮中上層部への批判―

『昭和天皇実録』によれば、情報部長白鳥敏夫は英語通訳と外交事情に関する定例進講、人事課長三谷隆信はフランス語通訳を担当することになった⁽³²⁾。二名体制となった「外交官宮内省御用掛」は役割分担により機能的な運用が可能となった。また、進講の実施場所も変更になった。表御座所において行われていた澤田時代は、白鳥時代からは御進講室において実施され、さらに侍従長が陪聴することになった⁽³³⁾。

しかし、昭和六年（一九三二）の満州事変を契機に、白鳥の言動は、宮中にも波紋が広がる。白鳥はいわゆる「外務省革新派」の筆頭格であり、情報部長として外務省の「スポークスマン」という側面を持つ

ていた⁽³⁴⁾。『西園寺公と政局』によれば、白鳥は犬養内閣の書記官長森格や陸軍の鈴木貞一中佐と連携し、各勢力との横断的なネットワークの構築を模索した⁽³⁵⁾。木戸幸一ら宮中の中堅層は白鳥らを外交情報源としており、また木戸は「此際外務省より白鳥君あたりが出かけて陸軍・外務等と云ふ立場を離れ、充分意思の疎通を謀り、軍行動の限界に見極をつけしむることが肝要なり」とまで述べた⁽³⁶⁾。その一方で、白鳥は天皇が「恐作パシフィストに被為在、夫れは西園寺、内大臣が其方の論者なるが為めなり」と述べるなど、西園寺、牧野をはじめとする宮中上層部への批判を展開する。これに対し、牧野は「高遠なる大御心を会得せざるの致すところにして、毎週咫尺し奉る事も考慮を要するの感を起せり」と強い憤りを滲ませた。また、牧野と親交があった駐日アメリカ大使ジョセフ・C・グレー（Joseph Clark Grew）は日記に、「白鳥は折にふれて相当勝手なことをしゃべりまくった男」とし、「外務省の攻勢的代弁者」と評している。このように、白鳥は天皇の相談相手としてはふさわしくないという認識が牧野ら宮中上層部において形成されていく。

昭和八年（一九三三）六月二日付をもって、スウェーデン公使に任じられたことに伴い、白鳥は宮内省御用掛を更迭された。後任の情報部長には天羽英二が任じられたが、御用掛の兼任とはならず、代わりに元オランダ国駐劄特命全権大使松田道一が任じられた⁽³⁷⁾。松田は帰朝後、昭和八年五月まで条約局長を務めた。そして、同年九月には外務省を退官した⁽³⁸⁾。そのため、松田御用掛は現役外交官としては約三ヵ月

重複していたが、「兼任」という形はとられなかった。天羽ではなく第一線を退いた松田が選任された背景には、先述したような宮中批判の高まりがあり、宮中と外務省としては、リスクを回避した格好となった。一方で、三谷人事課長は留任し、「外交官宮内省御用掛」は維持された。しかし、人事課は電信課や情報部のように、高度な外交情報を取扱う部署ではない。そのため、珍田が主導した高度な外交情報に基づく天皇の「御研究ノ御相手」としての性質を失った。換言すれば、松田道一は専任の宮内省御用掛であり、従来通りの御用掛として天皇の相談に応じる態勢となった。

昭和九年（一九三四）三月一二日、三谷人事課長は在フランス大使館参事官に任じられたことによって、御用掛も更迭された。後任には外務書記官日高信六郎が就任した。三谷と同様の人事課長による御用掛兼任であり、大きな変更はなかった。以後、昭和十二年（一九三七）四月一三日まで、松田道一と日高人事課長の二名体制として推移した。

四、儀典課の新設と鈴木九萬儀典課長の宮内省御用掛兼任

昭和十一年（一九三六）の二・二六事件では、斎藤実内大臣が暗殺され、鈴木貫太郎侍従長が重傷を負うなど宮中は大打撃を受けた。当時宮内大臣であった湯浅倉平は横滑りする形で内大臣に就任し、代わりに駐英大使の松平恒雄が宮内大臣に就任した。⁽⁴¹⁾

外務省においては、昭和十二年（一九三七）七月一日、大臣官房内に儀典課が新設された。これに伴い、大臣官房は、人事課、儀典課、

文書課、会計課、翻訳課及び電信課の六課体制となり、初代儀典課長には、鈴木九萬書記官が任命された。⁽⁴²⁾ 同年六月、枢密院における「外務省官制中改正ノ件審査報告」では次のように報告されている。

従来我が皇室ト諸外国ノ皇室又ハ元首トノ間ノ儀礼、来朝外国人ノ謁見其ノ他儀典ニ関スル事務ハ大臣官房人事課ニ於テ併セテ之ヲ掌理セシメタルモ逐年国交ノ増進ニ伴ヒ著シク該事務ノ増加ヲ来シタルノミナラズ儀礼ヲ通ジテ本邦駐在ノ諸外国ノ外交団トノ接触ヲ一層緊密ナラシメ以テ列国間ノ修好ニ万全ヲ期スルノ必要アルニ由リ大臣官房ニ儀典課ナル一課ヲ新設シテ専ラ右等ノ事務ヲ掌理セシムルコトセントスル。⁽⁴³⁾

このように、人事課の業務の合理化の観点から、儀典を取り除いた。換言すれば、外務省内における皇室関連の業務の専門部署が誕生したと言える。

また、昭和十二年（一九三七）六月二二日、広田弘毅外相は近衛文麿首相に対して、「在京外交団ノ接触ヲ一層緊密ナラシメ諸外国トノ国交ノ増進ニ万全ヲ期ス」と儀典課の意義を強調した。⁽⁴⁴⁾

初代儀典課長の鈴木は後年、儀典課の業務を次のように回想している。

儀典課長本来の仕事は一口で言えば外交団のお世話で政務には直接の関係が無いのです。然し儀典課長がこまかく気を配ってよく世話をすれば、その国に対する外交団の感じなり評判もよくなるというので、どの国でも儀典には局長級以上の先任大使格の人

を任命して重要視しているというのが実情で日本が一九三七年になつてはじめて独立の儀典課長のポストを作つたというのは晩きに失した形があつたのです。しかし儀典の仕事というのは随分こまかい、厄介な問題もあつたのです。例えば大公使が本国や外国から取り寄せる物に対する無税通関の問題とか、また新しい大公使館が出来ると、大公使館や公邸を世話してやるとか、また使用人、料理番の世話までしてやると言つた工合です。勿論部下が相当いましてこまかいことはやってくれますが。

このように、儀典課の業務としては、直接政務に関わらないため、儀典課長の宮内省御用掛兼任は人事課長からの継続性があつたと言える。

また、情報部と人事課が担つてきた外国の皇室報道に関する情報収集も人事課から引き継いだ。昭和十三年（一九三八）九月二日付、在エジプト臨時代理公使勝部俊男による、宇垣一成外相宛ての公信では、主管は儀典課の取り扱いとなつた。このように、かつて情報部と人事課が主管していた外国の皇室報道に関する情報収集は儀典課に集約された。なお、回覧先は情報部の各課となつていことから、情報部と共有していたことが窺える。

昭和十五年（一九四〇）九月二四日、鈴木が在エジプト特命全権大使に任じられたことにより、後任として、木内良胤が儀典課長に就任した。宮内省御用掛についても鈴木の後任として、兼任することになつた。しかし、御用掛としての木内の氏名は、昭和一六年四月一日現在

の『宮内省職員録』に記載がないことから、それ以前に木内は御用掛を更迭されたと考えられる。木内自身は少なくとも昭和一七年（一九四二）七月一日時点までは儀典課長として在籍している。そのため、木内の後任は任じられなかったと考えられる。しかし、昭和一八年（一九四三）七月一日時点の『職員録』の儀典課長には、吉岡範武が任じられており、宮内省式部職の御用掛を兼任している。⁽⁴⁷⁾ 一方で、松田道一元大使は戦時中を通じて宮内省御用掛を務めた。更迭の事由は史料的な制約のため詳らかでないが、現役の外外交官に求められたのは、通訳など実務的な業務であつたと考えられる。換言すれば、吉岡儀典課長の宮内省式部職御用掛兼任によつて、現役外交官の御用掛の業務は通訳など儀典に限定され、且つその職掌は明確になつたと言える。

おわりに

近代日本における宮中は、大正末期から昭和初期に転換点を迎えた。大正期に見られた皇室のあり方をめぐる模索では、同時に宮中と外交の関係のあり方をも問われた。こうした宮中改革の試みの一つに、現役の外外交官による宮内省御用掛の兼任があつた。天皇の外交問題に関する研究相手として誕生した「外交官宮内省御用掛」であつたが、その推進役となつたのは、珍田捨巳や出淵勝次、そして幣原喜重郎など外務省を母体とする人的なネットワークであつた。こうした宮中と外務省を有機的に結びつけた人的なネットワークの構築によつて、近代

日本における宮中と外交の関係は新たな展開を見せることになった。

当初は澤田廉三電信課長が御用掛を兼任した。電信課長は日本外交の情報を網羅的に把握することができるところから、その利点を生かして、天皇の外交に関する「御研究ノ御相手」として選ばれた。宮内省御用掛の後任には、白鳥敏夫情報部長と三谷隆信人事課長が兼任した。御用掛に選ばれた事由は史料的な制約から詳らかでないが、情報部と人事課は、海外の「我皇室ニ関スル新聞記事」の取り扱いをめぐる処理過程からも明らかのように、共に主管部署として皇室関連の文書を処理していたことと関係があると考えられる。情報部長は前任の電信課長と同様に、高度な外交情報を有することから、天皇の外交上の相談相手として適任であった。一方、人事課長は皇室に関する業務も総括していたことから、実務上において宮内省式部職との連携をも視野に入れていたものと考えられる。昭和初期は、宮内省式部職において林権助と岡部長景が、それぞれ長官と次長として宮中入りし、外務省を母体とする人材が宮中に配置された。同時に明治以来、宮内省が主管していた皇室と外交の関係においても、転換点を迎えることになった。そのような中で、白鳥情報部長の言動は宮中上層部への批判へと展開し、外交にとどまらず宮中上層部にも波紋が広がった。そして、ついに白鳥は情報部長を更迭された。後任の情報部長には天羽英二が任じられたが、宮内省御用掛を兼任することはなかった。代わりに外務省を退官した松田道一元大使が宮内省御用掛に任じられた。これは、白鳥の言動をめぐる宮中上層部の衝撃は大きかったと同時に、宮中上

層部は「宮中・府中の別」の原則という論理に影響することを懸念したと考えられる。かくして、松田は戦時期を通じて、終戦まで御用掛を務めることになった。一方、三谷人事課長は留任し、その後任の人事課長日高信六郎も引き続き兼任した。そして、昭和一二年に人事課から派生した儀典課長鈴木九萬が兼任することで、「外交官宮内省御用掛」は維持された。

しかし、人事課や儀典課は直接政務にかかわる部署ではない。すなわち、珍田捨巳が主導した高度な外交情報に基づく「御研究ノ御相手」としての性質は失われた。そして、鈴木の後任である木内良胤が宮内省御用掛を兼任したものの、アジア・太平洋戦争開戦の直前には更迭されてしまう。その後は、吉岡範武儀典課長が「宮内省式部職御用掛」を兼任し、通訳など皇室に関する業務に従事したと考えられる。

このように、現役外交官による宮内省御用掛の兼任の特徴は、高度な外交情報に基づく天皇の相談相手という実質的な側面から、通訳など外交儀礼という形式的な側面へと変化した。

以上、昭和戦前期の宮中と外交の関係について、「外交官宮内省御用掛」に注目して述べてきたが、その系譜は終戦によって断絶されたわけではなかった。昭和一二年の外務省大臣官房儀典課の新設は、現在の外務省大臣官房儀典官室の母体となった。また、人事課長として「外交官宮内省御用掛」を務めた三谷隆信は昭和二三年（一九四八）六月に侍従長となった。戦後、三谷は皇室と外交の関係について次のように回想している。

最近では天皇、皇后両陛下の外国御訪問のこともあり、皇室外交というか、陛下はじめ皇族方が直接外国との親善に御尽しになることが顕著であるが、戦争直後占領にも、日本を訪問する外国名士に両陛下はしばしば面接せられ、よもやま話のうちに親交を結ばれてきた。このことは日本についての外人の認識を改め、深くするうえに大きな効果があったと思っている。勿論陛下は政治を御語りにならぬ。しかし文化、経済、自然、その他百般の会話のうち、親しく両陛下に接した人々の心に残る何物かは、外国と日本との間に親善に役立ってゆくのである。こういった世間の眼にふれぬところに、陛下の外人謁見は大きな結果をもたらしているものと私は思っている。⁽⁴⁸⁾

三谷は、国際社会に復帰していく戦後日本において皇室の存在は必要不可欠であると述べており、皇室関連の業務に従事する外交官に期待される役割は、戦前と戦後において大きく変容したと考えられる。

【別表一】 外交官宮内省御用掛一覧

就任年月日	人名（役職）	人名（役職）
昭和2年4月21日	澤田廉三（電信課長）	
昭和5年8月30日	白鳥敏夫（情報部長）	
昭和8年6月2日	松田道一（元オランダ国駐節特命全権大使）	三谷隆信（人事課長）
昭和9年3月12日		日高信六郎（人事課長）
昭和12年4月14日		鈴木九萬（儀典課長）
昭和15年9月24日		木内良胤（儀典課長）
昭和16年4月1日		
昭和18年7月1日		吉岡範武（儀典課長・宮内省式部職御用掛）

※外務省記録「本省員宮内省御用掛兼任関係一件」（M.2.1.0.18、外務省外交史料館所蔵）、『宮内省職員録』を基に作成した。

【別表二】「我皇室ニ関スル新聞記事送付ノ件」一覧

	接到日	受領	主管	回覧先	備考
武富敏彦在桑港総領事→ 幣原喜重郎外務大臣 (公信公第127号) 昭和2年2月23日	昭和2年3月16日	情報部第二課 昭和2年3月17日	情報部	情報部第二課	
今井忠直在ケーブタウン領事→ 幣原喜重郎外務大臣 (公信南阿公第53号) 昭和2年3月7日	昭和2年5月2日	情報部第二課 昭和2年5月2日	情報部	情報部第二課 人事課	
昌谷忠在漢堡総領事代理→ 幣原喜重郎外務大臣 (公信公第71号) 昭和2年3月16日	昭和2年4月6日	情報部第二課 昭和2年4月6日	情報部	情報部第二課 人事課	
永井松三在瑞典特命全權大使→ 幣原喜重郎外務大臣 (公信普通第50号) 昭和2年4月11日	昭和2年5月23日	情報部第二課 昭和2年5月23日	情報部	情報部第二課 人事課	
栗山茂在仏臨時代理大使→ 芳澤謙吉外務大臣 (公信公第34号) 昭和7年1月14日	昭和7年2月16日	人事課 昭和7年2月17日	人事課		
芳澤謙吉外務大臣→ 一木喜徳郎宮内大臣 (公信人普通第72号) 昭和7年2月25日			人事課		
松平恒雄在英特命全權大使→ 広田弘毅外務大臣 (公信普通第271号) 昭和10年6月18日	昭和10年7月10日	人事課 昭和10年7月10日 情報部 昭和10年7月13日	人事課	欧亜局第二課 情報部第二課 情報部第三課	
井上益太郎在紐育総領事代理→ 有田八郎外務大臣 (電信普通第139号) 昭和11年5月1日	昭和11年5月23日		情報部第一課	情報部第二課	
鶴見憲在ポーランド領事→ 有田八郎外務大臣 (公信普通第222号) 昭和11年11月9日	昭和11年11月30日	人事課 昭和11年12月1日 情報部第三課(庶務) 昭和11年12月7日	人事課	情報部第二課	宮内省へ 「見セス」 の記載あり。
斎藤音次在埃及臨時代理公使→ 広田弘毅外務大臣 (公信普通第249号) 昭和12年6月11日	昭和12年7月14日		情報部第一課		
横山正幸在埃及特命全權公使→ 広田弘毅外務大臣 (公信機密第23号) 昭和13年1月30日	昭和13年3月15日		情報部第一課	欧亜局	
勝部俊男在埃及臨時代理公使→ 宇垣一成外務大臣 (公信普通第244号) 昭和13年9月2日	昭和13年10月10日	儀典課 昭和13年10月11日	儀典課	情報部第一課 情報部第二課 情報部第三課	
古関富弥在ベルーン領事代理→ 有田八郎外務大臣 (電信普通公第103号) 昭和13年12月20日	昭和14年1月20日	亜米利加局第二課 昭和14年1月30日	亜米利加局		
高和博在馬耳塞領事代理→ 有田八郎外務大臣 (公信普通公第139号) 昭和14年6月8日	昭和14年7月6日	情報部第三課(庶務) 昭和14年7月6日	情報部第一課カ	情報部第二課 情報部第三課	

※「我皇室ニ関スル新聞記事送付ノ件」(外務省記録L.1.0.0.8「帝国皇室ニ関スル雑件」第一巻所収)を基に作成した。

注

- (1) 大正末期から昭和初期にかけての宮中の特徴について、御厨貴氏は「宮中・皇室の制度や政治とのかかわり方についての一つの到達点であると同時に、摂政時代を含めて昭和天皇の登場による新しい宮中・皇室のあり方への模索にむかう出発点」と指摘している。（御厨貴「宮中・皇室をめぐる政治史」、近代日本研究会編『年報・近代日本研究二〇 宮中・皇室と政治』山川出版社、一九九八年）。
- (2) 茶谷誠一『昭和戦前期の宮中勢力と政治』（吉川弘文館、二〇〇九年）、松田好史『内大臣の研究』（吉川弘文館、二〇一四年）、梶田明宏「酒巻芳男と宮内省」〔前掲〕、『宮中・皇室と政治』所収 など。
- (3) 特に、明治期の宮中研究については、荒船俊太郎「序章―近年の天皇・宮中研究と本書所収論文の位置」を参照されたい（安在邦夫編『明治期の天皇と宮廷』梓出版社、二〇一六年）。ジョン・ブリーン (John Brean) 氏は、天皇の儀礼における贈答に注目することで、これまで別次元で議論されてきた近代天皇と近代外交を有機的に結びつけることを試みた。（ジョン・ブリーン「近代外交体制の創出と天皇」〔荒野泰典編『日本の対外関係 7 近代化する日本』吉川弘文館、二〇一二年〕、また、君塚直隆氏は英国王室の視点から英国の勲章外交の実態を明らかにした（君塚直隆『女王陛下のブルーリボン』二〇〇四年、NTT出版）。そのような中でも、真辺美佐氏は宮内省文書と外務省記録など一次史料に基づいて「皇室外交」の形成過程を明らかにしたことは画期的である（真辺美佐「近代日本における皇室外交儀礼の形成過程」〔安在邦夫編『明治期の天皇と宮廷』梓出版社、二〇一六年〕）。
- (4) 坂本一登『伊藤博文と明治国家形成―「宮中」の制度化と立憲制の導入』（吉川弘文館、一九九一年）。
- (5) 「宮内省省報」第一三三三号〔宮内省省報〕大正編六、ゆまに書房、一九九九年所収。
- (6) 「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」〔JACAR（アジア歴史資料センター）RefB1409090300、本省員宮内省御用掛兼任関係一件 (M21018)（外務省外交史料館）〕。以下、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」〔本省員宮内省御用掛兼任関係一件〕所収とする。
- (7) 澤田廉三（一八八八―一九七〇）、大正三年七月に東京帝国大学法科大学法律学科（弘法）卒業後、同年一〇月、外交官及領事官試験合格。中国などで在勤、パリ講和会議やワシントン会議全権委員随員などを経て、大正一五年一月、外務書記官・電信課長に就任（秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典 第二版』（東京大学出版会、二〇一三年）二七八頁）。
- (8) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」、〔本省員宮内省御用掛兼任関係一件〕所収。
- (9) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」、〔本省員宮内省御用掛兼任関係一件〕所収。
- (10) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」、〔本省員宮内省御用掛兼任関係一件〕所収。
- (11) 「外務省分課規程改正」（大正八年七月三日）〔外務省の百年』上巻、原

- 書房、一九六九年、一〇〇七頁)。
- (12) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」(本省員宮内省御用掛兼任関係一件) 所収。
- (13) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」(本省員宮内省御用掛兼任関係一件) 所収。
- (14) 田中義一外相発一木喜徳郎宮相宛公信「澤田外務書記官ノ宮内省御用掛被仰付ノ件」(外務省記録M21018「本省員宮内省御用掛兼勤勤務関係一件」所収)。
- (15) 宮内庁『昭和天皇実録』第四(東京書籍、二〇一五年)一九二七年四月二七日(六九二頁)、八月二七日条(七五七頁)など。
- (16) 宮内省御用掛の構成員については、宮内省編『宮内省職員録』の「宮内省御用掛」の項目を参照。
- (17) 前掲、茶谷誠一『昭和戦前期の宮中勢力と政治』一九頁、服部龍二「政党内閣、宮中とワシントン体制」(大津透編『岩波講座日本歴史』第一七巻、岩波書店、二〇一四年)一五九頁。
- (18) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」(本省員宮内省御用掛兼任関係一件) 所収。秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典 第二版』(東京大学出版会、二〇一三年)。
- (19) 三谷隆信の人事課長就任は吉田茂外務次官の推薦があったと後に回想している(三谷隆信『回顧録』非売品、一九八〇年)五九頁。
- (20) 前掲、「外交官宮内省御用掛兼勤二関シ珍田伯出淵次官来訪ノ件」(本省員宮内省御用掛兼任関係一件) 所収。
- (21) 前掲、『外務省の百年』上巻、一〇〇六頁。
- (22) 林権助(二八六〇—一九三九)、明治二〇年、東京帝国大学法科大学政治学科卒、駐英特命全權大使や秩父宮訪欧州随行などを経て、昭和四年四月、式部長官に就任した。
- (23) 岡部長景(一八八四—一九七〇)、明治四二年、東京帝国大学法科大学政治学科卒、アジア局二課長、対支文化事業部長を経て、昭和四年二月、式部次長に就任した。
- (24) 尚友俱樂部編『岡部長景日記』(柏書房、一九九三年)、一九二九年一月二五日条、一二頁。
- (25) 前掲、『岡部日記』一九二九年一月二四日条、二二頁。
- (26) 「皇室外交」をめぐる主管官庁の変遷については、前掲、真辺美佐「近代日本における皇室外交儀礼の形成過程」を参照されたい。
- (27) 前掲、『外務省の百年』上巻、一〇三六頁。
- (28) 「大正十四年四月十六日撰政宮御召ニ依り幣原大臣ガ為シタル進講ノ草稿」(外務省記録J1006「御進講関係雑件」所収)。
- (29) 栗山茂発幣原喜重郎宛、一九三二年一月一四日、「我皇室ニ関スル新聞記事送付ノ件」(外務省記録J1008「帝国皇室ニ関スル雑件」第一巻所収)。
- (30) 外交文書の処理過程については、熊本史雄「大正期における「組織外交」の展開と「外務省記録」」(『近代史料研究』第八号、二〇〇八年)を参照した。
- (31) 芳澤謙吉外務大臣発一木喜徳郎宮相宛、(公信人普通第七二号)一九三二年二月二五日、「我皇室ニ関スル新聞記事報告ノ件」(前掲、外務省記録

- 1,1008「帝国皇室ニ関スル雜件」第一卷所収。
- (32) 宮内庁『昭和天皇実録』第五（東京書籍、二〇一六年）一九三〇年九月一日条、六七八頁。また、一九三〇年四月三日より白鳥の進講は毎週木曜日午前十一時からと変更された（高橋紘編『河井弥八日記』第五卷、岩波書店、一九九四年）六六頁。
- (33) 前掲、『昭和天皇実録』第五、一九三〇年九月一七日条、六七八―六七九頁。
- (34) 戸部良一『外務省革新派』（中公新書、二〇一〇年）三七頁。
- (35) 原田熊雄述『西園寺公と政局』第二卷（岩波書店、一九五〇年）八三頁。
- (36) 木戸幸一研究会編『木戸幸一日記』上卷、一九三二年一月一七日条、（東京大学出版会、一九六六年）一一四頁。
- (37) 伊藤隆編『牧野伸顕日記』一九三二年一〇月八日条（中央公論新社、一九九〇年）五二四頁。
- (38) ジョセフ・C・グルー・石川欣一訳『滞日十年』上卷（ちくま文庫、二〇一一年）三七頁。
- (39) 『西園寺公と政局』によれば、内田康哉外相が松田道一の起用を提案し、最終的に牧野伸顕内大臣と相談して決められた（前掲、『西園寺公と政局』第三卷、八七頁）。もともと、宮中上層部も松田を「内々希望」していた（前掲、『西園寺公と政局』第三卷、八九頁）。
- (40) 松田は退官後に日伊協会理事長に就任し、第一線を退いた。
- (41) 松平恒雄宮相はその経歴を生かした「宮廷外交」を展開することになる（茶谷誠一『昭和戦前期の宮中勢力と政治』（吉川弘文館、二〇〇九年）第七章。
- (42) 前掲、『外務省の百年』下卷、五頁。
- (43) 広田弘毅「明治二十一年十二月達官舎貸渡内規別表中ヲ改正ス（外務大臣官房儀典課）」（類20274100「公文類聚、第六十一編、昭和十二年・第七十一卷・財政十三・国有財産・雜載」国立公文書館所蔵）。
- (44) 同右。
- (45) 天川晃監修『現代史を語る⑥鈴木九萬』（現代史料出版、二〇〇八年）二五頁。
- (46) 勝部俊男在エジプト代理公使発宇垣一成外相宛（公信普通第二四四号）、一九三八年一〇月一〇日付、「我皇室ニ関スル新聞記事送付ノ件」（前掲、外務省記録、1,008「帝国皇室ニ関スル雜件」所収）。
- (47) 内閣印刷局編刊『職員録 昭和一八年七月一日現在』、一九四三年。
- (48) 前掲、三谷『回顧録』一三三七頁。